

「FACE TO REAL - HIV/AIDS をめぐる 8 のリアル」

FACE
TO
REAL



© Estate of Keith Haring



現実にもきあうとき

HIV を持っていても、早く知って治療をしていけば、
ずいぶん長生きが出来るようになりました。
パートナーや、友人たちに伝えられる人々も増えています。
でも、検査に行くことが出来ないで、
エイズを発症してから感染に気づくケースも少なくありません。
感染したら死を覚悟するしかない、そんな時代は過ぎましたが、
エイズで亡くなる人はいまでもいます。

この冊子は、今、ぼくらが HIV をめぐって、
どんなところに立っているのか、わかりやすい言葉で伝えるために作られました。
知っているようで、知られていないこともたくさんあるようです。

現実に向き合う時に、痛みがともなうことがあります。
「痛そうだなあ、避けて通りたいなあ」なんてことも人生にはたくさんあります。
けれども、そこに向き合おうと思った時に、
あなたはひとりじゃない。
必要なときにサポートしてくれる受け皿がいくつもあります。
向き合ってみれば、大きくてこわかったものが、
あんがい等身大に見えて来ることもあるかもしれません。

WE'RE ALREADY LIVING TOGETHER.

「AIDS =
死じゃない」



**感染していることを早くに知って、
治療を始めれば発病を防ぐことができます。
でも、いろいろな理由で検査を受けることが出来ずに
発病して、治療がむずかしくなるケースは今でもあります。**

「AIDS = 死じゃない」とわかっているはずなのに、感染しているかもと本気で思ったとき、ただただ怖くなってしまったのは、どうしてなんだろう？ なかなか検査も踏み切れなかった…。また、感染を知った後、「もうダメだ」と思って、体調が悪くなるまで病院に行かなかったという人もいます。それは、まだ社会のあちこちに、あるいは自分の心のどこかに、死とつながるイメージがまだ残っているから？ あるいは、もっと他の何かを恐れているから？ 怖がるあまり向き合えなくて、そのために、より大きなつらい状況を背負ってしまうことが、まだまだたくさんある。大変な闘病生活が長引いたり、障がいが残ったり、そして、やはり亡くなることも。

だから、「AIDS = 死じゃない」、をほんとうに実現するのはひとりひとり。その言葉を社会や心のすみずみに響きわたらせるために、できることがきつとまだまだあるはず。

「恋人ともセーフだ」。

これ常識

恋人から感染してしまった、という人は、意外と多い。

「恋人だからナマで」というカップルは少なくないし、何度もセックスをする相手だけに、一方が感染してしまった場合には、もう一方にうつりやすいとも言える。

「ずっとお互いとしかHはしないから」。そう思い、あるいは誓って始めた関係…でも、時間がたつ中で、ひょんなことから他の人とHをしてしまった、という人が少なくないのも事実。そして、ふだん恋人とコンドームを使っていない人は、他の人とも使わないことが多いということが、アンケート調査でわかっている。それでも、「お互いだけ」と信じている仲では、「他の人としちゃった」とは言いづらい。残念ながら、そうやって、恋人からうつってしまうことがある。よく考えてみたら、つきあっている相手とコンドームを使わないセックスを繰り返すことは、ナマでやることに対するハードルが下がり、将来にわたり相手や自分をリスクにさらすこと。

それが、ほんとうに「愛」か、もう一度考えてみたい。

バリタチ≠安全

「タチしかしなかったのに、HIVに感染してしまった」とショックを受ける人がある。コンドームを使わなければ、アナルに入れることもリスクがあるし、フェラチオでも感染することがあるのだ。

ここで、HIVがどうやって感染するか復習！

HIVが感染するかもしれないものは、次の体液のみ。血液、精液（さきばしり液にもまじることあり）、ちつ分泌液、母乳。腸から出る液にもHIVが含まれることが最近わかってきた。HIVを持つてる人のその体液が、粘膜（ねんまく）や傷口に付くことで、感染する可能性が出てくるわけ。

粘膜というのは、直腸（アナルの中）、尿道口（おちんちんの先）、口の中、目、鼻や耳の奥。実は、アナルや直腸は血が出やすいので、その血が尿道口から入ったり、おちんちんの弱い部分の傷口から入ったりすることがある。だから、タチしかしなくても感染することが。相手の直腸の中に他の人の精液が残っていると、さらに感染しやすいよ。

HIVは何度も感染する

**すでに感染している人にとっても、セーフターセックスはと
ても大事。HIVのタイプは人によって違いがあるので、ふ
たたび感染することで、免疫を早く下げってしまうことにも。**

「もうきつと感染してるから、いまさら予防してもしょうがないし…」。

本気かどうかわからないけど、出会い系サイトで知り合った彼は、そんなメールを送って来た。「そんなのわからないから予防するにこしたことはないんじゃない？」と僕。「でも、数え切れないくらい、リスキーなエッチをしたし…」。そう言われると、「うーん、なら確かに」と思ってしまうなくもない。でも…。「でもね、もし感染しているなら、そういう人こそ、自分の体を守る必要があるんだよ。何度もHIVを入れたり、他の感染症にかかったりすると、ダメージが大きいから」。

そんなわけで、僕らは、セーフターなセックスをし、それをきっかけにセクフレになった。彼は最近、「検査に行ってみようかな」と言い出している。

SAFE SEX!



© K. Having 87 ⊕

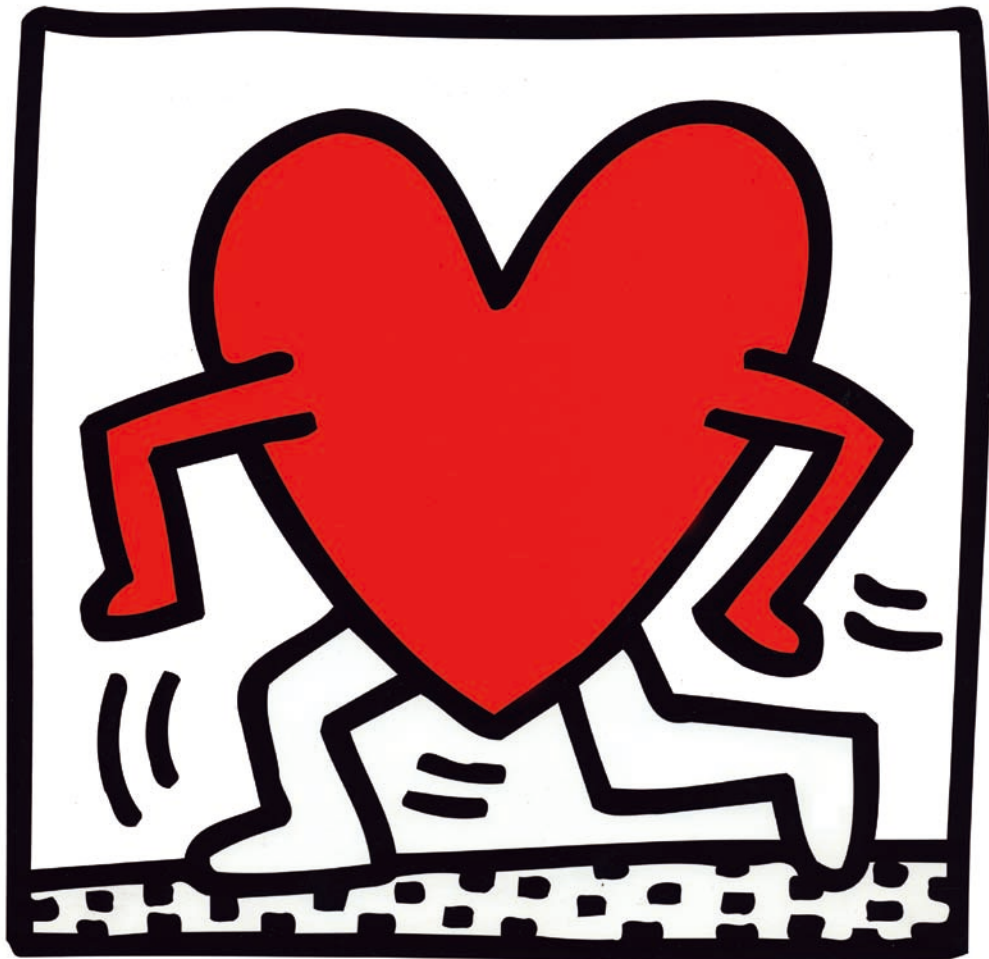
やっぱり、

「NO! ドラッグ!」

**何かに対して、「これは絶対にダメ!」って言うのは、
けっこうむずかしい。**

**でも、ドラッグ（薬物）に関しては、
自分に対して「ダメ!」と言う勇気を持とう!**

ドラッグの危険については、だれもが知っているはず。Hのときに使うと、リスクな行為に走りがち。なかには、体の抵抗力が落ちるドラッグもあるから、HIVも含めいろんな感染症にかかりやすくなる。種類によっては、深刻な影響を脳や体に与えるものもあるし、うつ傾向が強くなったりするメンタル面への悪影響もある。もちろん、言うまでもなく、依存症のおそれだって。「一回なら大丈夫…」。そう思って始めて、抜けられなくなった人はたくさんいる。そして、当然逮捕されることも（報道されているのは逮捕者のごくごく一部）。だから、まずは絶対に手を出さないこと。既にやったことのある人は二度とやらないこと。そして、もし抜けられなくなっている人は、まずは薬物依存の相談先にアクセスして欲しい。同じ経験をもつ人達の経験が参考になるはず。



Keith Haring



HIVの服薬には
金銭的な
支援がある

働いている人ならば、月に1～2万円で薬がもらえる。

**これは、血液製剤でHIVに感染した血友病の被害者たちが、
国との和解交渉のなかで、安心して治療できる環境をつくっ
てきてくれたおかげだ。**

感染がわかると、すぐに服薬が始まるわけではないが、服薬が始まると高額な医療費がかかる。しかし、1998年からは身体障がい者の認定を受けることができるようになり、医療費を減らすことが可能になった。また、自立支援医療、重度障がい医療などの医療費助成制度を活用して、月々の自己負担金を1～2万円に押さえることができる。ただし、これは所得により金額が変動する。手続きを知りたい場合には、病院のソーシャルワーカーや役所の身体障がい者手帳の担当部署で相談しよう。

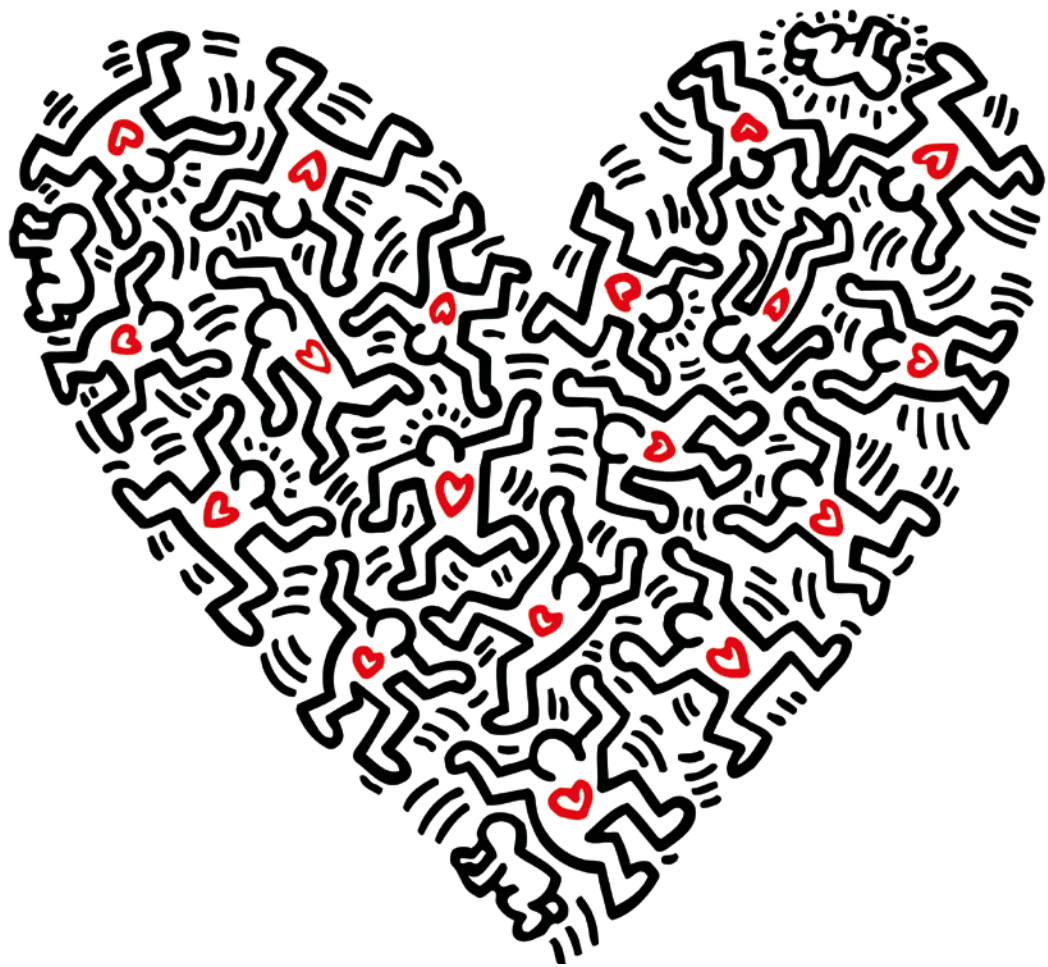
「HIV感染で人生は終わり？」
いやいや 先は長いんだよ

この10年でHIVの治療法が大きく進歩した。

検査をして、早めに感染を知ること、適切な時期に薬を飲み始めることができる。その結果、HIVが血液中に見つからないレベルまで抑えこむことが出来るようになった。

1997年頃までは、多くのゲイ/バイセクシュアルがHIV/AIDSで亡くなってきた。言いにくい話題のため、その事実はあまり知られていない。もちろん、今でも発症したり、その寸前まで感染していることが分からなかったり、治療がむずかしい症状が出る場合などがある、完全にコントロールできるようになった訳ではない。それに、強い薬を飲みを続けることによる副作用も当然ある。

専門家達は、こうした医学技術の進歩により、「HIV/AIDSで亡くなることは非常に少なくなった」という。つまり、HIVに感染しても、その先の人生はまだまだ続くわけで、早めにわかって、対策をたてる事が出来るってことだ。感染していたとしても、走る長さは短距離ではなく、長距離のマラソンであることが多い。



ひとりで"抱えこまないで"

だれでも問題を抱えることがある。

精神的に参ってしまったり、依存症になってしまったり。

そんなときに大切なのは、ひとりで抱えこまないこと。

相談することは大きな一歩。

心が弱り、病んでしまう時がある。気力が無くなったり、生きていくのが嫌になったり、自分や他人を傷つけたくなくなったり。また、依存症になることも…。ストレスを何かの行動で解消するというのはよくあることだけれど、それがコントロールできなくなったり、日常生活に悪い影響がでたりしているなら、依存症かもしれない。

ドラッグやアルコールだけでなく、セックスでもそういうことが起きる。そんな色んな形であらわれる心の問題も、体の病気と同じように、自分の力だけでは解決できないことが多い。「一人でがんばる」ことで、よけいに悪くしてしまうこともある。なるべく早いうちに、電話相談や専門家の診察などへアクセスしてみたい。誰かに話すことで、自分のことが見えてきたりするものだ。

2008年10月末に
大幅にリニューアル!!

携帯版



www.hiv-map.net/

すぐに役立つ
HIVの情報サイト

検査、相談、治療など、HIVをめぐる
様々なカテゴリーの最新情報がそろっています。

HIVマップ
www.hiv-map.net/



キース・ヘリングについて

1980年代を駆け抜けたキース・ヘリングはその短い生涯の間に芸術を通して社会に多大な貢献を残しました。世界の50都市以上においてパブリック・アートを制作しています。その多くはチャリティー、病院、孤児院、児童施設で制作されています。1988年にエイズと診断され、翌年89年にはエイズとHIV感染のためのリサーチや関連機関の援助、同時に恵まれない子供たちの教育の奨励を継続するため、キース・ヘリング財団を設立しました。ヘリングの作品には、自分自身の病との葛藤と同時に、生命と普遍性への力強いメッセージが込められています。彼は作品に見る明白な線と象徴的な造形で、エイズにおける認識と、自覚、そして活動を世界中の人々に伝えようとしました。1990年2月16日ヘリングはエイズによって31歳という若さでこの世を去りましたが、その偉大な芸術と慈善事業は伝説となって今も生き続けています。

詳細はホームページをご覧ください。 www.haring.com

FACE TO REAL - HIV/AIDS をめぐる8のリアル

第一版

発行：エイズ予防のための戦略研究・MSM 首都圏グループ

協力：キース・ヘリング財団 (Estate of Keith Haring, N.Y.)、中村キース・ヘリング美術館、梁瀬薫 (YDNY productions)

企画編集：生島 剛、砂川秀樹、張由紀夫 イラスト：キース・ヘリング デザイン：mmkg タイトル文字：らんぜ

問い合わせ：エイズ予防のための戦略研究事務局 東京都新宿区高田馬場 4-22-46 ザ・テラス 204 特定非営利法人ぶいれい東京

TEL: 03-3361-8964 (担当：生島, 岩橋) E-mail: sennyaku.tokyo@gmail.com

発行：2008年 無断コピー・転載お断り

このブックレットは厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)「エイズ予防のための戦略研究」(研究リーダー/市川誠一)により作成されました。

All works © Estate of Keith Haring

